
砂漠のコギト

河灯 良平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の「ギト

【Zコード】

Z2155G

【作者名】

河灯 良平

【あらすじ】

帰宅した主人公は、そこで普段とは異なったものを見つける。次第にそれを中心に物事が歪みだす……

仕事を終えて帰宅した前田茂雄は、そこで見た光景に驚愕した。二十年間、慣れ親しんだ我が家。家具や食器、先日購入した大型の液晶テレビも傷一つなくそのままである。では、家のどこかに彼を驚かす何かがあつたのだろうか？

いや、そうではない。一階建ての一軒家、外装、構造、何一つ変わっている様子はない。もつとも一階まで知りうることはできないが、恐らく変わりはないだろう。更に述べると、毎月返済を続けているローンもなくなりはしていないはずだ。

それにも関わらず、彼は驚愕したのだ。それは何故か？
彼が帰宅した家には見たこともない女がいたのだ。

女はシンプルな赤いエプロンを着用し、少しも緊張感を漂わせずに（むしろ馴染んでいた）食器を配膳していた。まるで自分が住んでいる家であるかのように。女を確認した時、泥棒ではないかと思ったが、泥棒が食器の配膳などしないであろう。

しかし、その女は妻の友人などではなかつた。妻は自宅に友人をあまり招くような人間ではないし、その数少ない友人を彼は把握している。そのつもりだ……

「 おい」

茂雄の口から出た言葉は、その状況を理解できない戸惑いから気の抜けた声だったが、女の耳には届くには足りていた。

女は野菜が盛りつけられた皿をそつとテーブルに置き、ゆっくりとこちらを見る。人工的な明かりが女の顔半分を照らす。

やはり知らない顔だ。

「あら、あなた、おかえりなさい。今ちょうど夕食の準備が出来た

といひですよ」

女の黒く艶のある長い髪が揺れる。その毛先を無意識に田で追い、すぐに視線を女の顔に戻す。

女の思いがけない発言に、思考が混乱し体が重力を失い、口元が釣り糸で引っ張られていつように引き攣つっているのが分かる。

「お、お前は誰だ！」

「何です？ それは」

口元にそつと手を当てて、小さな声で笑う。

「何のじ」「冗談です？」

女は笑みを浮かべたままエプロンを外し、こちらに近づきながら再び言つた。茂雄は右手に持つていた鞄を床に落し、ゆっくりと後ずさりをする。

「お前は誰だ！ 何故私の家にいる！」

叫び声は薄暗い廊下を抜けて奥の闇に消えて行く。女の顔からは笑みが消え、一瞬の間全ての感情が消え去り無表情になつたかと思うと、その表情は怒氣の様相を帯び、鋭い眼差しは茂雄を突き刺した。

眼光に怯むと同時に、彼には新たなる問題が頭をよぎる。妻の事である。

「さ、さ、沙織はじこに……私の妻をじこだ」

女はさらに怒氣を顔に表す。

「じこ冗談は止めてください」

有無を言わさぬ声で続ける。

「あなた、私をからかってじこしゃるの？ それとも何ですか？ あなたは妻の顔を忘れたとおっしゃるのですか」

女の声は先程より低い。

「何を……」

予想せぬ返答に茂雄は閉口する。女が何の事を言つてているのか理解できない。

「妻の顔を忘れるものか！ 沙織をじこへやつた！」

「いい加減にしてください！ 沙織は私です！ そんなたちの悪い冗談は止めてください！」

「お、お前は、沙織ではない！ 何を言っている！ お前は一体

誰なのだ！」

実際、女の顔は妻のそれとは似ても似つかないものである。この女が異常な事はもはや疑いようのないことだ。そして、ここで問題なのが妻の所在である。

茂雄は混乱する頭を必死で落ち着かせ考える。まず考えられる事は、この女は妻をどこかに監禁されているのではないかという事だ。誘拐。しかし、それならば何故この女はこの家に留まり、妻のふりをしているのだろうか。そう考えると彼の頭は再び秩序を失い、思考が四方に飛び散り混乱した。

「もう止してください…… 沙織は私です。冗談だとしても酷すぎますわ。私はあなたが仕事から帰つてすぐにお食事が取れるよう、冗談をしていただけですのに…… 私が何をしたって言うのです？ どこか気に入らない所があつたと言うなら、どうぞ遠慮なくおっしゃってください。いつそ叱つてもらつた方が、この様な仕打ちを受けるより数段ましと言つものです。それにしても酷すぎます」

そう言つと女は床に膝をついて両手で顔を覆い、泣きだした。この様子を見て茂雄はさらに混乱した。女の言つている事は未だに一片たりとも理解できない。どうやら誘拐犯では無いようだが、それはそれで気味が悪い。この女は何者なのだ？

「さつきから何を訳の分からぬことを…… お前は沙織ではない。何が目的なのだ！」

「あなた……」

女はなおも座り込んで泣いている。茂雄はそれを見て警察に通報する為に、スーツのポケットから急いで携帯電話を取り出す。

しかし、ボタンを押す指は焦りの為に逸れ、違う番号を押し、更なる焦りを引き起こし、携帯電話は彼の手から滑り落ちた。即座に拾い上げようと手を伸ばし、もう少しで掴むところで携帯

電話に何かが覆い被さつた。それは女の手であった。

女は携帯電話を拾い上げてこちらを見る。乱れた黒髪の間から覗く顎は赤く充血している。

「どこに電話をする気です？ もしかして警察……」

女は絶句したまま細く長い指を使い携帯電話の電源を切る。電源が切れたことを知らせる電子音が、沈黙した空間でやけに大きく聞こえた。

「か、返せ……私の電話を返せ！」

「嫌よ！ 返すとあなたは警察に通報するでしょう！」

恐ろしい剣幕の女をして茂雄は言葉を発することができないでいる。

「あなたが通報すると警察が家に来ます。そうなるともちろん近所にも知れて、あなたの気が狂ったと思われてしまつわ！」

ますます茂雄の頭は混乱した。この女は通報されると困るのは自分ではなく茂雄の方だと言うのである。確かにこの女が私の妻であるなら、気が狂つたと思われるかも知れない。

しかし、この女は沙織ではない。妻ではないだ。

恐らくこの女こそ頭がおかしいのであり、偶然か故意か知らないが、この家に入りこみ、自分は私の妻であると思い込んでいるのであろう。

女は誘拐犯の様ではなく、さらには丸腰で強盗犯の様でもない。何よりも私に危害を与えようとする意思を全く持っていないのである。そう思うとこの女を一層気味悪く感じたが、身の危険を感じるような恐怖は少し薄らいだ。

まず何よりもこの女に私の妻ではない証拠を示せば、この問題は即座に解決するのかもしれない。そしてこの女を精神病院なり刑務所なり、詳しくは分からぬが（何故なら私が今後全く関わりないであろう場所であるからだ）然るべき施設に隔離すればいいのだ。

「お前は沙織ではない。そして私の妻でもない」

震える声を何とか抑え、落ち着いている様子を裝う。自然と声は

低くなり、腰の位置も低く身構えていた。

「あなた……」

女は眼を一杯に見開き涙を流す。

「あなたと呼ぶのは止めてくれないか。 そう呼ぶのは妻の沙織だけだ」

「沙織は私です！ あなた一体どうしたって言うの？ まさか本当に気が狂つてしまつたの！」

「私は気など狂つてはいない。 それはお前の方だ！」

「あなたが何を言つているのか私にはさっぱり分かりません！」

これでは堂々巡りである。 どうしたら良いのか分からず、狂氣じみた女の目から思わず視線をそらす。 その時、リビングの棚の上に置かれた小さな写真に目がとまつた。

ここからは光が反射の具合で何が写つているか分からぬが、それは数週間前に妻と箱根へ旅行に行つた時の写真だ。 何の変哲もない旅行の写真だが、沙織は大層気に入つたようで、それを飾つたのだった。

茂雄は素早く駆け、写真を掴むと女の方へ突き出す。

「これが証拠だ！ ここに写つてするのが私の妻だ！」

女は写真を見る。 空間が凍りつき沈黙が支配する。 女は血色を失つた能面の様な顔で立ち尽くす。

どれ程の時が経つたのだろうか。 それともほんの一瞬であつたのだろうか。 女の視線が写真から私の顔へと移るのを見て、元の時間の流れに戻される。

「何を言つているのよ。 あなたの妻はそこに写つている私よ

女の言葉こそ何を言つてているのか分からなかつた。 しかし、一抹の不安は茂雄を支配し、焦りを搔き立てる。 そして、ゆっくりと写真の方へ眼をやる。

体中の感覚が鈍り、冷たくなつていいくのが分かつた。 空間が歪み自分の輪郭がぼやけて行くような錯覚に包まれ、倒れないように踏ん張ろうとする足は震えている。

写真に写つてゐる女性は田の前にいる女であった。

「あ……」

口から出た音は言葉をなしてはいなかつた。それ以前に何を言つべきかさえ頭には浮かんでいなかつた。自分と女が写る写真が信じ難かつた。

しかし、さらに茂雄を混乱させるものがその写真の中には写されていた。

写真の中には茂雄と女の間に、小さな男の子がいるのだ。七、八歳といった感じのその子は一人の手を取りにこやかに笑つてゐる。もちろん、茂雄には子などいない。しかし、写真に写る二人はどう見ても、父、母、子といった様子である。そもそも、この二人とは以前に会つた事もないし、ましてや一緒に写真を撮る事などあるはずもない。

「お父さんおかえりなさい」

突如、聞こえた声に茂雄は反射的に身構える。少し高く幼い声は、二階から聞こえていた。

階段を急いで下りる音が聞こえた。女は明らかに狼狽してゐるようだ、「健吾、部屋で待つていなさい！」と叫ぶ。

しかし、女の呼びかけは功を制さず足音は次第に近づき、茂雄のすぐ後ろまで来た。意を決し恐怖と混乱に怯える体に振り返り、その正体を確認する。

そこにいたのは写真に写つてゐる男の子であつた。男の子は明るく笑つてゐる。

驚愕する反面、やはりなと言つ氣持ちが少しあつた。写真を見た時点でのこの男の子もこの家にいるのではないかと少し心の隅で思つていたのだ。女に健吾と呼ばれた男の子も、やはり見た事はなかつた。

「お父さん、お母さん、どうしたの？」

男の子は私達の異様な雰囲気を察した様で、先ほどの明るい笑顔は一瞬の間に凍りつき、青ざめて行くのが分かつた。

「さ、君。お母さんと言つのはこの人のことかい？」

髪を乱してこちらを呆然と見つめる女を指差す。それに対して男の子は、何の反応も示さず立ち尽くす。男の子の顔から明らかに困惑しているのが分かつた。

「あの人があの母親と言つのは分かつていてる」

茂雄は女を指差す。男の子が少し頷いたように見えた。

「では、お父さんと言つのは誰の事だ？ ここには君のお母さんと私しかいないじゃないか、お父さんはいないよな。だけど君は先程、お父さん、お母さんと言つた。おいおい、まさか私の事を父親などと言つのではないだろうね！ 「冗談じゃないよ！ 君！ 健吾君と言つたかな、黙っていたのじゃ分からぬじゃないか……何か言いたまえ！」

男の子の掴み、強く揺らした。彼は悲鳴を上げ、体を小さく震わせながら涙を流しだす。一瞬、見えた彼の瞳の奥底にはつきりと恐怖が刻まれていた。茂雄の体中に冷たいものが走る。

「止めてください！ 健吾に暴力なんて！ 止めて！」

知らぬ間に思考が停止していた茂雄は、女の割れんばかりの叫び声を聞いて、はつと気づく。その時には女がすぐ近くに来ていた。女はどこにその様な力があったのだろうか、私の腕を掴み物凄い力で男の子の体から引き離し、庇う様にして背を向けて男の子に覆いかぶさつた。

「な、何なのだ、これは？ お前たちは誰だ？ い、これではまるで私が悪者ではないか……」

茂雄は混乱した。今起こっている全ての事が理解できないでいる。

「あなた！」

女の声が聞こえる。

「止める！ 黙れ！ 勝手に私の家に侵入してきて何が目的だ！ それと出でいけ！」

茂雄はなおも考えがまとまらないまま、叫ぶ。そもそも、理解できぬものを前にしてどうやって、考えをまとめると言つのだ。

「お父さん……」

男の子の声が聞こえる。

「黙れ、この餓鬼！ 私に子供などいない。お前の様な餓鬼は知らん！」

茂雄はさらに混乱する。

「金が欲しいのか？ 残念だな、お前らにやる金など一銭もありはない。分かつたら、妻を返してさつさと消えろ！」

茂雄は全くもつて解決の糸口を見つけることができず、さらにさらに混乱の沼に沈んで行く。これは一種の絶望である。

「な、なんだよ。何とか言えよ……そ、そんな目で私を見るな！ ま、まるでそれでは私が……」

固く抱き合つた女と男の子は、茂雄を見据え恐怖と憐れみが同居する瞳を涙で潤わせている。

「まったく、頭がいかれている連中は何をするか分からぬ。この、こういう奴は然るべき施設に入れて、出さないのが一番なのだよ。うん、そうだ。出さないのがいいのだ。早く、連絡を……施設に連絡。連絡、連絡。あ、携帯電話……携帯電話を返せ！」

先ほど奪われた携帯電話は女の手には握られていない。そして、女の足元に落ちている携帯電話を発見する。茂雄は一人が先ほどから抱き合つて全く動かないのを見て、ゆっくりとの方へ近づく。二人は茂雄が向かつて来るのを見てさらに強く抱き合つた。

その時、茂雄は足もとで何かが割れる音を聞き、足元に僅かな痛みを感じた。驚いて足を飛び退けると、そこには先ほど私と女と男の子が写つた写真があり、その写真立てのガラスの部分が割れて足に小さな破片が刺さっていた。

写真立てを持ち上げて見遣る。そこにはやはり、私と女と男の子が写っている。

「それがあなたの家族です。私があなたの妻で、健吾はあなたの子供です」

女ははつきりと言つた。茂雄はそれを聞いた瞬間、体が軽くなつ

たよう感じがして、頭が真っ白になつていった。

気づいた時には写真立てを頭上に上げていた。そして、それを振り下ろす。ステンレスの写真立ては十分な加速を得て、女の頭を強打する。茂雄はそれをまるで映画のワンシーンを見るように無感情な眼差しでその光景を見ていた。

短い悲鳴とともに女は倒れ、それを見た男の子は目を見開いて大声で叫んでいる。女の頭からは血が流れている。茂雄はそれを見て、これくらいの出血では命に別条はないな、などと冷淡な気持ちで考えていた。どうやら女は気を失った様で、目を閉じたままである。

頭が真っ白な状態で女が倒れている姿をいくらの時間かみつめてしまつたのではないと不安がよぎる。茂雄はしゃがみこみ女の手首を取つて脈を測り、生きている事を確認すると安堵した。

一刻も早く、警察に通報しなくてはならない。死んでしまつては大ごとなので救急車も呼ばなくてはならない。法律には詳しくないが、この場合は正当防衛であろう。これでやつと、問題は片付いた訳である。

その時、茂雄の後頭部に鈍い衝撃を感じた。そのまま床に倒れて、何も出来ぬまま視界が徐々に暗くなつていく様を僅かに残る意識で感じ、そして完全なる闇に包まれた。

朦朧とした意識の中で茂雄は目覚めた。目を開けると一面が白色で死んでしまつたのかと僅かに思つたが、定まらぬ視点でよく見ると天井の様だつた。しかし、視界も水中で目を開けた時の様にしつかりとした輪郭を持たず、どの様な建物の天井かなどは分からぬ。そして体はだるく何かに固定されているように力が入らず、動かすことができない。

まともらぬ思考でゆっくりと現状を把握しようとしていると、視

界に人が写る。しかし、女性であること以外分からぬ。何か話しているようだが、その声はエコーがかかつた様に頭の中を反響し、聞きとることができない。何とか聞こうと耳に神経を集中させようとしてみる。

「あなた」

女性がそう言ったのだけは、しつかりと聞き取った。そうか、沙織の声か。やつと本当の妻が帰つて来たのだ。安堵すると、また視界は暗くなり眠りに落ちた。

3

茂雄は砂漠にいた。そしてそれが夢の中である事を自覚していた。眼前に広がる広大な砂の海は自らが意思を持つてゐるかのように一つの集合体として蠢き、茂雄を飲み込もうとしている。夢の中であるのに激しい渴きに襲われ、体は水分を求める。その体に降り注ぐ太陽の業火の如く射光は、無慈悲に身を焼いていく。

熱い砂に足を取られながらも歩く足の前に都合よく表れるオアシス、あああれは蜃氣楼であるに違いないと茂雄は思う。しかし、その幻を追わずにはいられない。幻のオアシスは当然の如く姿を消した。歩き疲れ、砂の上に倒れこむ、砂の熱は皮膚から体内部まで進攻しようとして、蠢く砂の群は彼に覆いかぶさる。茂雄は眼を閉じた。

茂雄は眠りの中で声を聞いた。それは優しい女性の声だった。その声は茂雄の心を落ち着かせ、安心させる。声は海の様に辺りを包み揺らめき、その声に抱かれながらさらに深い眠りへと誘われた。

4

明るい光を瞼の裏に感じ目覚める。まだ頭は重いが以前と比べると意識ははつきりしている。窓のカーテンから漏れる光が顔に当た

つていて。どこか見覚えのあるカーテンだ。少し経つて、自分がいる部屋が自宅の一室である事に気づいた。じつやら、全ては解決し自宅でこづして横になつていてるようだ。

その時、鈍い後頭部に痛みを感じて顔をしかめる。明瞭な記憶はこの後頭部の痛みで終わり今に至る。頭の後ろに手を当てようとして初めて、腕が動かない事に気づいた。重たい頭を動かして見て、茂雄は驚いた。彼の腕がベッドにロープでしつかりと縛られているのだ。

事態が理解できず、足元を見ると手と同様に足も縛られている。これは一体何なのか。この様な経験はもちろん初めてだ。長い間気を失つていたようなので、ベッドから落ちないようにとの配慮であろう。

「誰か。沙織、沙織いないか」

反応がない。茂雄の声は壁に吸収され、部屋に満ち満ちる静寂に不安が募る。

「沙織、沙織」

今度は声を大きくして呼んでみる。さすがに主人がこのよつた姿になつてゐるのにそのままにして、いなくなると言つ事はないであろう。その時、遠くから急いでこぢらに向かつてくる足音が聞こえてきた。沙織、沙織と頭で反芻する。じつやう、そのまま放置された訳ではないと分かり胸を撫で下ろす（もっとも腕は縛られている為実際に胸を撫で下ろすなど不可能なのが）。足音は大きくなりドアの前で止まる。少しの間があつてドアノブがゆつくりと回転し、無音でドアが開く。

しかし、そのドアから入つて来たのは、妻ではなく気が狂つているあの女であった。

「あなた、気分はいかが？」

女は恐々とした様子で尋ねる。何故か怯えの色が見て取れる。悪夢はまだ終わつていなかつたのだ、完全にこの女の問題は解決したと思いこんでいた茂雄は絶望と恐怖に慄いた。その様子を見て女の

表情は更に強張る。女の頭には包帯が巻かれその上からネットを被つていた。そうだ、自分が女を写真立てで殴ったのだった。

復讐される！ 茂雄は必死に逃げようと試みるが、四肢はベッドにくくりつけられ上体を起き上がらせることすらできない。気が狂いそうな恐怖に怯えながら、懸命に逃れようと体を捻る。

「来るな！」

「あなた。まだ私が分からぬの」

女はドアの前で戸惑った様子のまま立ちつくしている。その両手は強くロングスカートを握りしめている。

「ロープを外せ！ 私はお前など知らん！」

尚も体をひねり続ける。ベッドの軋む音が部屋に響き渡る。その時何を思つたのか女は恐る恐るこちらに近づいて来た。茂雄は恐怖のあまり女から顔をそむけ、「近寄るな」と叫び続ける。それでもしないと恐怖で発狂しそうだつたのだ。刹那、振り返つて女を見ると、女は涙を流しながらすぐ近くに立つてゐる。尚更恐ろしくなり、再び顔を背ける。

女が手を押さえるのを感じた。あまり突然のことだつたので、何もできず身を硬直させていると腕の関節辺りに小さく鋭い痛みが走る。思わず体をのけぞらせ痛みの部分を見ると、小さな血がぷくりと出ている。驚いて女の方に見ると、その手には無機質で何かを拒絶するかのように注射器が握られていた。

「何をした！ 僕に何を注射した！」

女はまだ泣いたままで、黙つてゐる。その様子を見ながら、急に感情の高ぶりが萎えてきた・女の顔をぼんやりと見ながらすつと意識を失つた。

「あなた」

そう小さく呟く声だけは、しつかりと聞こえていた。

再び朦朧とした意識の中で茂雄は目覚めた。重たい瞼を開いたその先に最初に映つたのは、男の子だった。男の子は泣きながら謝っている。

「「めんなさい。」「めんなさい。頭は大丈夫？」

声が揺らぎながら頭に響く。男の子が言う頭が大丈夫であるかの意味を理解するのに、少し時間がかかつたが私の後頭部の傷のことであろう。頭をこの男の子が殴つた事に対する謝罪だ。今まで、誰が殴つたのかなど考えなかつたし、その様な余裕はなかつた。あの状況で私を殴る事が出来たのはこの男の子だけだ。

その時の状況を思い出す。床に倒れた女。女から流れる血。その血が付いた写真立て。私は攻撃な人間ではないが、あの時は女の頭部を物で殴つた。茂雄も少し異常であったのだ。それに恐怖してこの幼い男の子は私を殴つてしまつた。そしてそれを今、謝罪している。涙を流しながら。それを見ると何故だか、被害者であるのにこちらが申し訳ないような気もしてしまつ。

しかし、相手は頭の病気か何か知らないが、不法な侵入者であることは変わりなく、それに私はベッドに縛り付けられて、得体の知れない物まで注射されている。そう思うと怒りが湧いてきそうなものだが、薬のせいだろうか。氣だるさを残し、考えがまとまらずただ現状を把握しようとしてみるだけで精一杯で、気持は不思議と落ち着いている。

何か言おうとするが、上手く声を出すことができない。それでも喉から音を絞り出そうと苦心する。

「健吾」

口から出たその言葉に、男の子は驚いた表情を浮かべたが、それ以上に声を出した本人である茂雄が驚いていた。なぜ名前を呼んだのだろうか？ そもそもこの子は誰なのだろうか？ あの女は？ 分からない事が多すぎる。そもそも向こうは私の事を夫であり父親であるという。これではまるで私が異常者みたいではないか。ベッドに縛られているのに、魂は空虚に浮かび上がり所在なく飛び回つ

ているような、所在の無さを感じながら再び眠りにつく。

6

部屋の中に漂う香りが私の飢えた体が私を呼び起こす。すぐ近くに女が立っている。その手にはトレイに乗った暖かい湯気を出している器と透明のコップに入った水があった。

茂雄の体は食べ物を欲していた。口には甘い唾液が次々と湧き上がり、胃は芋虫のように蠢いている。

女は私の枕元にトレイを置き、髪を搔き上げ容器の横にある匙に手を伸ばす。茂雄は必死に容器に顔を近づけようとするが、僅かに届かない。女は茂雄の額にそっと手を当て、枕の凹みに再び彼の頭を戻す。

匙で器に入ったものをゆっくりと掬うと、愛おしそうに息を吹きかける。僅かなさじの傾きから、その中に米粒が入っているのが分かる。その米粒が目に飛び込んで来たのと同時に鼻孔に甘い米の香りが入り込み、あらゆる神経を刺激し虜にした。かつてこのようにまざまざと食べ物の匂いを嗅いだ事があつただろうか。

女は程よく熱を失つた匙の中身を口へ慎重に近づける。茂雄の口は抗うことなく、口を開き受け入れる。茂雄が食べたものは粥だった。まぎれもなく粥であつたが、なんとも表現しがたいほど美味な粥だった。そして、その後は雛鳥の様に女に粥を要求し、呑み込むとすぐにこれ以上ないほど口を大きく開いた。粥はすぐなくなり、満腹に達しはしなかつたが、茂雄は満足していた。

米粒を付けた口元を女は薄いピンク色のハンカチで拭う。そのハンカチは茂雄が妻の沙織にプレゼントした物だ。

茂雄は女の顔を見る。女の顔は美しく、そして穏やかだった。この時、茂雄の中で何かが弾けた。初めは小さな気泡の破裂の様なものだったが、隣接する気泡の破裂を誘発し、次第に大きな破裂の渦となり、茂雄を揺さぶる。

はたしてこの美しく、穏やかな女性が異常者であると言えるのか？　私の思い違いでない確証はどこにあるのか？　それは勿論、私自身の記憶である。しかし、その記憶が確かにすると誰が保障するのである？　いや、誰も出来やしないのではないか？　そうに決まつていて。自身が自身の中にある記憶を疑つた時点で、それは不確かな物になつてしまつのだ。そして、実際に私は自身の記憶を疑つていて。自分の記憶が正しいと言う確固たる確証を持てないので。私が記憶の差異を感じている今、私は漆黒の闇に一人放り出された宇宙飛行士の様に孤独である。しかし、私の記憶が間違つていた事を認めたならば、この孤独から解放され、再び暖かい現実、家族の元に帰れるのだ。

「すまない」

そう言つた茂雄の目からは涙が流れていた。すべて自分の思い違いであつたのだ。どこか暗い洞窟に迷い込み、道を間違えたのだろう。まだ、本当の出口には辿り着いていないが、きっと目の前にいる女性を受け入れる事がこの長い迷宮の終着点なのだ。

「沙織、すまなかつた」

嗚咽を漏らしながら、繰り返す。女はなおも優しく微笑んでいるが、瞳には涙が浮かんでいる。その時、左腕に何かが動くのを感じた。女がロープと解いている。ロープは思いのほか強く結ばれていたようで解くのに戸惑っている。しかし、しばしの時間をおいて茂雄の四肢は自由を得た。そして、まるで解放を歓喜する様に手足の血管は血液を押し出している。

女はそつと茂雄の半身を起し抱擁する。温い吐息がうなじを湿らせ、豊満な胸から伝わる鼓動が伝わる。これで良かったのだ、自分たのただ僅かな記憶の誤解がこの様な事態を生み出したのだ。この美しく女神の様な女性と、心優しい息子、この状態のどこに不満がある？　私はどうかしていたのだ。幸福に感じている今を壊す必要はない。

「もういいのよ。あなた」

抱き合つたままの女は茂雄の耳元でしおれへと、顔を歪め、声を出さずに笑つた。

その目に、もう涙は浮かんでいなかつた。

(後書き)

最後の結論は読んでいただく方に委ねました。

皆さんはどうの様に感じたでしょうか?

女が正しい? 間違っている?

それとも二人とも?

皆様がどのように感じたのか非常に興味があります。

まだ未熟なので至らない所があると思いますが、そこは厳しく批判していただきたいです。

この度は読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2155g/>

砂漠のコギト

2011年3月17日18時24分発行